

待望の復刊!

「いったい、物をそげえ造っちから、どげえすんのか」

「まず、電力がとめどなく必要なのだという現代神話から打ち破らねばならぬ。」

◎ 反火電闘争を描いた松下竜一の代表的ルポルターージュ、『暗闇の思想を』火電阻止運動の論理(74) および続編『明神の小さな海岸にて』(75)の二著を一冊にまとめ、3・11後のいま、再提起する。

2012年 9月7日発売

一九七〇年代、九州の静かな町に突然降りかかった火力発電所建設計画。「高度経済成長」の時代、国や電力会社の「開発至上主義」「電力中心主義」に真っ向から挑んだのは、組織も名もない、心やさしきしろうとたちだった——著者自身が中心者として関わった反火電運動を記録した異色のルポ。孤立の底で紡ぎ出され、四十年の時を超えてなお輝きを放つ「暗闇の思想」とは何か。

この時代をいかに生きべきか?  
いま再び注目を集める  
「暗闇の思想」とは?

松下竜一 著

● 四六判並製 413頁  
ISBN978-4-87714-427-2

影書房刊

● 解説：鎌田慧(ルポラ)「経済より人間が大事だ! 宣言」 定価2,400円+税

# 暗闇の思想を 明神の小さな海岸にて

新版

「……悲劇的なことに、発電所の公害は現在の技術対策と経済効率の枠内で解消し難い。そこで電力会社や良識派と称する人びとは、「だが電力は絶対必要なのだから」という大前提で、公害を免罪しようとする。国民すべてへの文化生活を支える電力需要であるから、一部地域住民の多少の被害は忍んでもらわねばならぬという恐るべき論理が出てくる。本当はこういういわねばならぬのに——誰かの健康を害してしか成り立たぬような文化生活であるのならば、その文化生活をこそ問ひ直さねばならぬと。」

「冗談でなくいいたいのだが、「停電の日」をもうけてもいい。……月に一夜でもテレビ離れした「暗闇の思想」に沈みこみ、今の明るさの文化が虚妄ではないのかどうか、冷えびえとするまで思惟してみようではないか。」(本文より)



まつした・りゅういち (1937~2004) 大分県中津を拠点に、様々な市民運動に取り組みながら、生涯「虐げられる側」に立って書き続けた記録作家。著書に『豆腐屋の四季』、『ルイズー父に貰いし名は』(以上講談社)、『松下竜一 その仕事』全30巻(河出書房新社)など多数。

◎ より深く、より強く、よりやさしく、脱原発へ——

注文書

\*書店様記入欄 [取次番線・コード印]

松下竜一著 ISBN978-4-87714-427-2 定価2,400円+税

『暗闇の思想を/明神の小さな海岸にて』

冊

お客様氏名: \_\_\_\_\_

電話番号: \_\_\_\_\_

ご住所: 〒 \_\_\_\_\_

【ご担当名: \_\_\_\_\_】

影書房

〒114-0015 東京都北区中里3-4-5-101 TEL: 03-5907-6755  
eメール: kageshobo@ac.auone-net.jp http://www.kageshobo.co.jp/

FAX: 03-5907-6756

※ご注文の際は、上にお名前・住所・電話番号・注文冊数をご記入の上、最寄りの書店にお持ち頂るか、小社へ直接ご注文下さい。